

Title	社会は図書館である：整理する社会、整理なき秩序
Sub Title	In this librarizing world : unpacking our library
Author	清水, 学(Shimizu, Manabu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.4- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：文学社会学の可能性
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会は図書館である

——整理する社会、整理なき秩序——

In This Librarizing World: Unpacking Our Library

清水 学

整然とした地獄よりは混沌とした地獄のほうが好き
——ヴィスワヴァ・シンボルスカ「可能性」

1. 「社会の詩学」のために

ひとはその生のまわりに、みずから居心地のよいような「秩序」を設計し、総じてそれが私たちの社会の仕組みを紡ぎあげる。あたかもハチやアリが、その本能に従って規則正しく精確な巣作りを行うものであるように。だが、人間にとっての巣作りは、もうすこし秘めやかで、ときに多様な偏奇や逸脱を伴うものでもある。ひとがこれまで形成してきた、秘密基地やコレクションの数々を思い起こそう。あるいはもっと身近な、われわれの住居や室内はどうか。そこにみいだされる、いわば秩序の示す偏りを、春日 (2005) は世界の「癖」のようなものと語った。この種の偏奇にこそ、ひとはどうしようもなく心惹かれるのでないだろうか。

生活を秩序だった姿で整えること。「整理＝組織する (organize)」と表現されるその活動は、私たちの社会において規範的なものですらある。そして「生きることは分類することである。私たちは身の回りのすべてのものを整理し、しかるべき枠やカテゴリーに位置づけないと気がすまないし、落ち着かない」と、鷲見 (2009) はこの精神が博物学や百科全書の企てを貫いていたことを指摘する。

分類が社会生活の根元であり、逆にまた分類の根元に社会生活が宿ることを教えてくれたのは、デュルケム＝モースの社会人類学だった (Durkheim et Mauss 1903)。実験工房ウリボに属する作家ペレックは、同様の思考の線に沿って、私たちの日常にある「考える／分類する」という行為のもつ社会学的位相のいくつかを記述している (Perec 1985)。こうして、論理学や自然科学から室内や日常生活にいたるまで、分類し整理するという営みが私たちの社会の隅々を覆っているわけである。

このような秩序形成は、あたかも私たちがアリやハチやモグラと似ていなくもないことを示しているようだが、しかしそれはかならずしも目に見えるような仕方で「秩序だって」いるのではない。すべての実務的組織がそのように明白に「組織だって＝組織化されて」いるわけでもない。他人にとっては混沌としか映らないような空間のなかで、ある種の「快適さ」が認められるということもあるだろう。私たちの生活にはまた、先に述べたような「癖」や「歪み」

や「偏り」がつきものである。

そうであるなら、社会やその日常的諸場面を整える原理を単純に「秩序化」や「整序化」の名で語るとは、むしろ私たちの社会生活をどこか窮屈で不便で不活性なものにするのではないだろうか。ドゥルーズ＝ガタリ（Deleuze et Guattari 1980）にならい、生活の巢穴的秩序は見通しの利かない、融通無碍で自在な、多数の接続と通路をもつと語るべきだろうか。こうした独特の「偏奇」を描きだすのに、文学や芸術の世界ほどふさわしいものはない。しかし同時にそれもまた、奇妙なほど「秩序化」されてとらえられてきた憾みも残る。そうした偏奇が記されているはずの「書物」、その書物が蓄えられている「蔵書」や「書庫」、それらを内にもつ「部屋」や「住居」、あるいはそれらが表象する「社会」や「世界」のイメージにいたるまで。こうしてわれわれは、すでに「図書館としての世界」をみてきたのだった（清水 2018; 2019）。

文学社会学の研究がその対象とするのは、かならずしも文学作品そのものではない。といって、ことさらに作者や読者や出版制度という外的環境に言及したいわけでもない。「文学作品」の内容を、外部としての「社会」によって観念的に説明すること以上に重要なのは、書物やテキストそれじたいを物質的存在とみなし、あるいは社会や人びとの営みを文学的な事象として物質的に分析する、そのような観点である。「文学的分析」「詩学的分析」という用語は、ともすれば「情緒的な鑑賞」の意で解されることも多いが、そうではなく上記のような観点をここではひとまず「社会の詩学」と名づけておきたい²⁾。

この観点からするなら、整理をすること、生活に秩序を与えること、社会をひとつの分類体系として形成することは、まことにひとつの文学事象、ひとつの詩学であるといえる。社会が、目的論的な諸個人の身も蓋もない即物的「社会有為」なふるまいから成り立つとする、いわば「リア充社会学」のイデオロギーが多くの社会学研究を充たし、詩的な実践として社会を理解することから遠ざけている³⁾。社会生活の諸位相にはもっと妄想や、無意味や、過剰や混乱があふれているはずなのである。

そもそも社会のなかにあらかじめ何らか「文学的な質」が備わっているものでなければ、いかなる「文学社会学」の試みも無益に終わるだろう。社会生活がすでに「文学的」にできあがっているものでなければ、いかにしてそれを文学的分析と関連させることが可能だろうか。すなわち、社会はすでに文学現象である。ありうべき「文学社会学の可能性」の中心として、本稿はこの点を強く主張しておきたい。

2. 蔵書と社会秩序

ニネヴェの地で発掘された、アッシリア王アッシュールバニパルによる紀元前七世紀の文書庫にあった三万枚にもものぼる粘土板は、すでに「行政記録、歴史年代記、詩、科学、神話、医学文献、王の命令と認可書、占い、予言、神々への賛歌など、いくつものセクションに分けて整理されていた」という。すなわちそれは「史上最古の「分類された」図書館」を意味していた（Murray 2009）。

触れたように、デュルケムやモースからレヴィ＝ストロースにいたる思考の線は、社会を成立させる根幹に「分類」と「整序」があることを示した。その意味では、まことに社会は図書館である。根本 (1998) が詳述するような、「文献宇宙」や「書誌宇宙」の概念は、この種の普遍化された分類と整序の営みをとらえるものである。デュルケム＝モースからガーフィンケルへと引き継がれた関心はさらに、これがたんに認知的秩序にとどまらず実践を伴う社会的秩序であることを強調した。すなわち、社会〔という〕秩序は社会的〔に構築される〕秩序である。分類とは、「それらの分類をつくり出した社会そのものを異った面から表現しているにすぎない」(Durkheim et Mauss 1903)。

公設私設、量の多寡を問わず、立ち並ぶ書架や収められた蔵書は、ひとつの「秩序の光景」として私たちの目を奪う。ましてや今日の図書館や書店のように、大量の書物が林立する書架を埋め尽くしているさまは、それじたい魅惑的である。開架式の壁面書架や通廊に整列する書架、クーポラに抱かれた大閲覧室の光景が、いかに人びとを魅了してきたかについては多言を要しない。それは、書物の膨大な集積と整序が生む、知への全能感と不能感のはなはだ両義的なアマルガムなのだった (松浦 1998 ; 桂 1995 ; 清水 2018)。

とはいえ単純に、他人の書架はなぜか気になるものである。知人の部屋を訪れると、私たちはすぐに不躰な視線を投げかけてしまう。赤澤 (2017) いわく、「子供の頃、友人の家に上がり込むと、まず気になったのは本棚の中身だった。小学生のときに、家庭訪問に行く先生にまわりつき、友人の家をぞろぞろと大人数で訪ね歩いたときにも、私が一人で友人の本棚に入っていたと、幼なじみが最近になって教えてくれた。そんなふうに戻り振り返ってみると、人の本棚を見たいという欲求は常に私の中にあった」。おおっぴらに表明するのは憚られるものの、同種の行動をとる人間は少なくない。書架を一瞥し、背表紙のひとつひとつを目で追い、そこにどのような書目が並んでいるか、そしてその配列の順や秘められた意味をじっくり確かめたくもなるのだ。

近年ではむしろこの種の興味は隠すところを知らず、ひとつの「趣味」とすらなっていて、いわく『本棚が見たい!』『書斎探訪』『本棚・拝見』『私の本棚』『センセイの書斎』『絶景本棚』と題目が並ぶ。その帯等に寄せられた惹句には、「人の魂、本棚に宿る／スタイリッシュ、すっきり整然、床積み、魔窟に野放し系 etc.」、「人の本棚は、とっても不思議におもしろい」、「その人自身のことが／またひとつわかったような、／本の並びを見て／うんうん、とうなずいてしまうような／そんな感じ」、「整然。雑然。啞然。杳然。陶然……。本棚の森に迷いこんだ本棚探検隊のルポ!」、「書斎を見れば人が分かる! いい空間にいい生き方あり」と、あふれんばかりの好奇心が踊っている。

こうして「人それぞれの本棚に並んだ本の背文字に視線を漂わせながら、あれこれ想像力を働かせる。本の好きな人にとって、読書の延長上にあるもう一つの悦楽だといっても過言ではないでしょう」(川本ほか 1996) と、私たちはまるで一巻の書物を読むように、本棚を、書架を書斎を、また図書館を「読む」のである。本棚の歴史をものしたペトロスキーは正当にも

「本と同様、本箱もしばしば読み解くことができる」と指摘する（Petroski 1999）。図書館を舞台とした一群の「図書館小説」はまた「図書館を読む」ことを主題にした小説でもあり、他人の書棚に向けられた私たちの好奇心を満たし、その読解を励ますための装置として機能した（清水 2018）。

ずいぶん以前から書物にはインテリアとしての機能が備わっていたことが知られ、世には種々の「書斎術」、「魅惑の図書インテリア」のたぐいがあふれる。近年では「書店お泊まり企画」や「泊まれる図書館」を謳う宿泊施設も急増し、好評を集めている。もちろん日本の一般家庭にとって、「洋書」「百科事典」「美術書」「文学全集」などは一定の地位の象徴となり、展示のアイテムとして役立てられた。かくて各々の書斎には自己顕示＝実現的な「蔵書」が並ぶことになる。

したがって上の「好奇心」は、かならずしも知識人や読書家における「知識欲」というものには相当しない。見る側にとっても単純な秩序への憧れと異なり、どちらかといえば覗き趣味にも近い様相を示す。すなわち他人の書棚は「人格」とそれに応じた諸々の「癖」を秘めていて、私たちはそれを垣間見ては悦に入るのである。先に羅列した探訪書をひもとけば、一言に「他人の本棚」といってもじつにさまざまである。物体としてサイズごとに区分されている書架もあれば、ジャンルあるいは著者名順の配列にこだわる書棚もある。几帳面に並べられ一分の隙もない書架もあれば、ただのカオスとしか映らないような書架もある。奥行きを利用し二重三重に詰め込まれた真空恐怖の本棚、丁寧な配架の上や手前に無造作に横積みされた本棚、数冊しか置かれず余白に満ちた本棚もある。

いわゆる書棚ばかりが書棚でない。床上あるいは壁沿いに積まれた崩れる寸前の書物、すでに崩れてゴミの山としかみえない堆積物もまた立派な蔵書である。廊下の書架あるいは直接に積みあげられた書物、玄関や土間にまであふれている蔵書がある。ときに「魔窟」とよばれときに「ゴミ屋敷」とすらよばれるのは、こうした風景を指している。だがそんな風景にまた、どうしてもなく惹かれてしまうものが存在するのだ。

整理された（あるいは散乱した）書棚はそれじたい、ひとつひとつの「人格」をもっている。「私の本棚は、私より私らしい」（新潮社編 2013）から、「自らの手で描き上げた、自分自身の内奥の姿、分身ともいえる本棚は、人に見せたいような気も、ちょっぴり隠しておきたい気もする」（アスペクト編集部 1991）。そこには「「自分史」の具象化」（渡辺 1988）として、ひとつの秩序が隠されそして「読まれる」ことへと開かれている。

ひとりひとりにとっての「秩序」がある。中学3年生にして手に入れた「書斎」の記憶を辿れば、「書斎に座して壁面の蔵書を見渡しているとき、その静まりかえった僅かながらの燈下だけが、愛おしく満ち足りた我が世界である」（谷沢 1996）。ある設計士は、こうも吐露する。「ぼくの好みからすると、本というのは壁面の書棚に背を見せてダーッと並んでいるべきなのだ。それも、あまり整然とはなく持主の気ままな扱いを示して多少乱れたり重なったりして並んでいるのが良い。そういう風にして並んだ本に囲まれていることで、自分のアイデンティ

ティが目に見える形になる。これはもちろん、他人に誇示するためではなく、言わば蔵書に象徴される自分と対面し続けるためである」(渡辺 1981)。

「室内空間」の秘めるメンタリティには文化史の領域も関心を示し(海野 1990; 奥野 1999; 柏木 2011)、十九世紀ブルジョアの室内空間に着目するベンヤミンはこう述べる。「真の居住者は蒐集家」であるはずのその「室内は単に私人の宇宙であるばかりでなく、またその保護ケースでもある。住むということは、痕跡を留めることである。室内ではその痕跡が強調される。覆いやカバー類、容器やケース類がふんだんに考案され、そこに日常ありきたりの実用品の痕跡が残る。居住者の痕跡も室内に残る」(Benjamin 1935)のだ。

こうした「痕跡」こそが「癖」を意味する。そして、それは「秩序」の反対物ではない。「折り癖」や「書き癖」と同様、ひろくコレクションの示す偏りや歪みとして、秩序には癖があらわれる。この種のしらすらすの痕跡を残してゆくことが、生活することである。そしてひとがその蔵書とどのように格闘してきたかは、ひとが秩序や混沌と向き合ってきた、まさにその歴史にほかなるまい。

3. ベンヤミンは蔵書を整理する

生きることにより、独特の癖を伴った痕跡がどうしようもなく世界のなかに刻まれる。これが「読むこと」に対応する「書くこと」の営みである。古沢 (2012) によって「痕跡本」とよばれたもの、すなわち書き込みや挟み込みなど、以前の持ち主の痕跡が残されたまま古書店に処分された書物がある。手にした私たちは、自覚もないまま書物のなかに刻み込まれた「生活」を読むことができる⁴⁾。蒐集する人間は、マニアにかぎらず、整理し組織する存在としてその行為のなかに自己の痕跡を刻み込む。ハチやアリのあまりに整然とした巣作りの美学にはほとんどその痕跡が感じられないが、その意味では人間の営為の雑然さのなかにこそ個性があらわれる。

だが、こうした「痕跡」に悩まされるものもいる。相続した義兄の蔵書をめぐる顛末を描いた短篇のなかで、旧所有者の思いを背負った蔵書は数百冊といえども重たいものだった(由起 1949)。処分するにも荷解きするにも、他人のしかも故人の遺品の整理ともなれば途方に暮れざるをえない。この挿話に思いを馳せながら、愛書家で知られる紀田 (2017) が語るのは、自己の蔵書を整理する苦悩である。紀田にとってこの場合、「整理」の意味するところが「処分」であるという事実がいかにも耐えがたく映る。蔵書家は手放すことを知らないのだ。自己の痕跡に悩まされ、「なぜ蔵書は増え、そして散逸するのか」と、問うまでもない問いを投げかけるのみである。

しかし蔵書家とは、まことに因果な存在である。蒐集に不足があるといっちは嘆き、多ければ多いでそれを嘆く。きわめてアンビヴァレント、というより自業自得にしかみえないような蔵書をめぐる逸話に事欠くことはない。まるで律儀な篤志家のように、同じ本を繰り返し繰り返し、何冊も購入する愛書家の言葉を耳にしたことがあるだろうか。日下三蔵ならば、ただ

「売っていたからです」と答えるのだ（喜国 2011）。まさしく混沌と一体化したような、秩序の自己反復運動である。

『蔵書の苦しみ』『本が崩れる』『本で床は抜けるか』『無限の本棚』とタイトルを並べあげては胸が苦しくもなるが、じつのところこれらはみな蔵書自慢の一種であり、反省や改悛の情はとても額面通りに受け取れるものではない。そして何よりこれらが売り上げを伸ばし、人びとに関心と好奇をもって受け入れられているという点が、われわれにはきわめて興味深い。蔵書狂や愛書狂には、社会のなかに居場所があると誤解したくもなるのだ。

さてここにも、蔵書の荷をひもときながら、文字どおり山と積まれた書物の堆積を前にし、途方に暮れるのではなく、あるいは悦ばしげに途方に暮れながら、一種の幸福を語る蒐集家がいる。蔵書家によく知られたエッセイのその夢想的なまでに印象的な語り口のなかでベンヤミンが触れているのは、「無秩序と秩序の二極のあいだ」の「弁証法的な緊張」についてである（Benjamin 1931）。そこには「蒐集家はその蒐集物に対してもつ関係」として、「蒐集物よりもむしろ蒐集行為そのもののありよう」が示されているというのである。

書架に収まる前のくすんだ木箱のなかの未整理の蔵書には、いまだ整然とした配置の秩序を知らない未分化の至福がある。そこには「秩序というものに付き物のあのかすかな倦怠」はまだない。だから「蓋を開けた木箱が雑然と置かれている」状態や、「木屑混じりの埃が充滿した空気」「紙屑の散らかった床」「二年前の闇からたったいま再び昼の光のもとに引き出されて積み上げられた書物」は、まことに幼年期的な幸福の謂にほかならない。

対比されているのは、「蔵書目録の規則正しさ」とその対極にある「蔵書の無規則さ」だ。この「無規則さ」が、整然とした配置の肩の凝るような秩序を知らない、「期待に張り詰めた」気分へと蒐集家を開いていく。溢れ出るのは「記憶の混沌」である。転居の経験はひとを身軽にするはずだが、しかし蒐集家としての性がそれを彼に許さない。「事物世界の観相家」として、一冊一冊の向こうに認められるのは、それが置かれていた数々の場所、数々の本棚、数々の部屋、数々の都市のイメージ、すなわち「運命の劇場」の展開である。

彼は「書物の所有」が、「あまりにも習慣となじんだために秩序のように見えてしまう無秩序以外の何もの」でもないことを強調する。「所蔵されたこれらの書物のいつもながらの乱雑さ」をいとおしげに眺めるベンヤミンの眼に映っているのは、秩序、雑然、混沌、偶然、運命の数々が、混じり合い押し寄せてくるさまである。「まさしくこの、書物の蒐集や所蔵といった領域では、秩序というものはすべて、深淵上の宙ぶらりん状態にほかなりません」。ベンヤミンは、そうほくそ笑むのだった。

この「深淵」に裏打ちされた「宙ぶらりん」の感覚に彼は魅せられている。その多幸感あまりに強く、「蔵書の荷解き作業を途中でやめるのがどれくらい難しいかということほど、この作業の魅力をはっきり物語るものはありません」といわしめる。そしてそれは、その人格とともにある。「蒐集という現象はその主体を失うことによって自身の意味も失う」のだから、「私的コレクション」のみが正当な蒐集であると強調されるのだ。

いまだいかなる「秩序」にも収まらず、これから形成されんとするコレクションの意味は、多様な癖のもつ数々の襲によって支えられる。そしてその秩序を、蒐集家は何度も何度も再建する。あちらに移しこちらに移し、移動させては元に戻し、あちらから一冊こちらから一冊と並べ替える。あたかも「古い世界を新生させる」かのように。

蔵書の整理はだれにとっても、いかなる機関にとっても難業である。だがその難業のもつ魅力がある。ひとはかならずしも単純な「秩序」を好んでいるわけではない。秩序と混沌のせめぎあいやアマルガム⁵⁾。われわれは「整理」という概念をとらえなおすべきところにさしかかっている。すなわち、整理をするとは私たちにとってどのような営みなのだろうか。

4. 秩序の魔法——「オーガニゼーション」の思想

世に「整理本」があふれている。いつのころからか「整理」ブームである。「断捨離」や「片づけ術」を指南する実用書は数知れない。それらは「整理整頓」を言祝ぎながら、リビングやキッチン、机や引き出し、住居にとどまらず、スケジュールや仕事、思考や感情、人間関係にいたるまで整理が可能なのだと主張する。「分類」によって仕事ははかどり、能力ある人間は仕事もスケジュールも感情も「管理」するのだと。今日の社会はまさに、この種の管理と制御による「整理術」によって成り立っているといえるだろう。

しかもそれらは実務の領域を越え、いつしか「生き方」や「心のあり方」について語りはじめている。いくつか目に通せばわかるように、「整理する生き方」よりも「生き方の整理」についてが説かれているのである。こうなってくるとまさに牧野(2015)の指摘するとおりで、日常世界を統御し管理する技法のなかに、自己啓発の心的言説があからさまに浸透してきている。もっというなら整理できないもの、それになじめないものは「社会不適格者」として「矯正」や「治療」の対象とすらなる。医学的根拠の有無はともあれ、整理(の困難)を「心の問題」とする言説は多く、したがってときにインテリア・コーディネーターと境を接しながら、ある種の「スピリチュアリズム」にも近づく。

「片づけ収納メンタルセラピスト」を名のる勝間(2014)などは典型で、「片づけられない、捨てられないのは、心の中に原因があるのです」という。しかも「片づけをすれば、気持ちも整理されて、人生が変わる」のでなく反対に「片づけよりも心の中のそうじのほうが先」という。問題なのは「心のごみ」であるから、まずはそれを「メンタル・クリアリング」しなければならない。「自分の心に向き合い心の重荷を下ろせば、必ず「片づけられる人」「捨てられる人」になれる」のだ。

あからさまにこうでなくとも、ひとは「統御」や「管理」の能力をもたなくてはならない。近年では「アンダー・マネジメント」のように感情を統御することもまた立派な「社会人」の資質として求められる。美德というよりスキルや責務として、何ごとであれ「組織人」には「オーガナイズ」する能力が問われるのである。

昨今では「ライフオーガナイザー」(一般社団法人日本ライフオーガナイザー協会)の呼称

すら生まれ、このように説明される。「アメリカでは一般化している「オーガナイズ（住居・生活・仕事・人生等あらゆるコト、モノを効果的に準備・計画・整えること）」という概念を普及し、それを促進するための専門的な人材」（森下 2012）であると。これは、「プロフェッショナル・オーガナイザー」として「米国で生まれ」たものを「日本でアレンジされた整理術」ということになるらしい（日本ライフオーガナイザー協会 2011）。同様に大塚（2005）によれば、「生活オーガナイザー（プロフェッショナル・オーガナイザー）」とは、「ただ、ものを片づけるだけではなく、その人がどんな生き方をしたいのかを見いだす手助けまでする、大変奥の深い仕事」で、「そこには、物理的な散らかりは、自分の内面の混雑・混乱につながる、という認識がある」ということだ。

じっさい、上記「心の問題」には立派な診断名も与えられている。慢性的に片づけることができず、ひたすらモノをため込む「強迫的ホーディング」が、2013 年に改訂された DSM-5 から独立した診断基準を設けられ、精神疾患のひとつに含められている。すでに 80 年代からアメリカで活躍していた「プロフェッショナル・オーガナイザー」は、「慢性的に片づけることのできない状態」（CD）に対するサポートを行う専門職だった。ベストセラーとなった『片づけられない女たち』（Solden 1995）では、とくに「AD（H）D」の診断名と関連づけられ医学的な議論の端緒をなしている。

「片づけができないこと」「整理ができないこと」は、看過できない社会病理であるといわんばかりだ。私たちの社会において「片づけ」はもはや医療＝道徳的領域に属しているのである。こうして「整理」や「片づけ」のエキスパートは、同時に文字どおりのカウンセラーとして「治療」の役割を果たす⁶⁾。まさに「心理学化」「心理療法化」する社会の一端を垣間みる思いだが、ここでは医療化の議論そのものに立ち入ることはしない。ただひとつ言えるのは、「AD（H）D」の事例と同様、「片づけられないという問題」の一部は、「片づけられない状態を受け入れられない社会という問題」でもあるということである。

むしろ関心は、これらの言説が、「魔法の言葉」「ときめき」という「整理本」の用語法と別ものであるとは思えないところにある。「片づけること」「整理すること」は、科学的な用語で提起されていようといまいと、自分を変える「魔法」なのである。この事態が「ダイエット本」の氾濫と正確に対応していることが興味深い。モノにあふれた現代は「ホーダー」（ためこみ症者）を発明すると同時に、「肥満」もひとつの病理に仕立てあげた。

「整理」「整頓」の言説は、まさしく「ダイエット」の言説と相似である。いくつもの「〇〇法」が現れては消える。それはひとつの修行術であり、自己啓発である。民間の創始者も含め、それらしい肩書きと実績を伴って提示され、「医学的根拠」が語られる。そのまま「整理」することは「ダイエット」だと説くものすらいて、目標を持って計画的に「減量」し気をつけないと「リバウンド」がくるのだ。

「外面」を対象にしながら、結局最後は「内面」が強調されるところまで酷似している。「整理」や「片づけ」の実務というより「内面」や「精神」が語られているとき、まさにベン

ヤミンのいう意味で政治が美学化している (Benjamin 1936)。「収納はひとつの作品であり、クローゼットもまたひとつの作品です。その人の人柄を表現する作品なのです」(小山 2016) というのは、そうしたわけである。だから、「その作品に、今では使わないものが紛れ込んでいたらどうでしょう。着ないものが混在していたらどうでしょう。自分の作品が淀んでしまします」とまで非難されるのだ。

しかしこれはあきらかに、「作品」をめぐる特定のイデオロギーにすぎない。外山 (2012) の語る「掃除のポイエーシス」に耳を傾けてみよう。現代アートの現場において、一方に画材の散布や厚塗り、筆触の強調、身体的・物理的接触の痕跡など、キャンバスに対する「汚れ」とみなされるものをそのままアートとして提示するものがある。対して、人間的手仕事や素材の物質性の痕跡をできるだけ消去し、画面を「きれい」に整えることに美学をみいだすものがある。このように、いわば「汚す」派と「きれいにする」派が、対となってアート界に存在していることが発見されるのだ。

ここで外山は「掃除派」の言説が職業的アーティストにとどまらないことを確認する。すなわち、「掃除を尊ぶ文化は、その営みそれ自体に修養・鍛錬としての機能を認める傾向がある。たんに物理的空間を調べ「きれい」にするというだけではなく、心身の浄化をもたらすというのである」。日常をきれいに整えることにより、生活が、心が「きれい」になるのだ。同様の傾向を日常的「整理術」「片づけ法」のなかに確認し、それを「自己啓発」の言説のなかに位置づけたのが先の牧野 (2015) だった。

ともあれ「掃除派」の立場は、秩序の回復と維持を求める。このような「掃除」の美学はしかし、日常的な労働の現場における「掃除」の実践とはいささか異なった強調をもっている。すなわち「掃除はもともと生のための技術」であるのに、ここでは「生の否定・自然の抑圧に反転」しているのだ。したがって、「掃除礼讃の言説では可視化することのないこの陥穽を放置したまま掃除の美学・詩学を標榜することはできない」。

他方の「汚す」派に関しては、たんなる「反秩序」への回帰、「動物レベルの層への降下」でなく、それは「ケガレの古い呪術的な力」の回復、すなわち「掃除の失われた半身」であると診断される。こうした民俗学的／文化記号論的な議論がわれわれに想起させるのは、「カオスモス」(丸山 1991 など) の用語である。近代合理性の秩序がきれいに「掃除」してしまった、そのかぎりでは非合理性としての混沌を、秩序形成の過程と一体的なものにとらえるなら、じつは「掃除派」と「反掃除派」の「両者はともに本来ひとつの全体をなしていた古い技術の分裂した姿」にほかならないのだ (外山 2012 ; Berman 1981)。

だとするなら「合理化」や「効率化」の側に位置するはずの「整理整頓」の言説が、その逆の機能を担っていたとしても驚くにはあたらない。牧野もみてとっていたように、「整理」や「片づけ」の思想は、その意味ではきわめて「魔術的」な色彩に彩られたものである。ちょうど近代合理性の精神が「プロテスタンティズムの倫理」による魔法の言葉とともに開始されていたように。

ここには「秩序」という名の魔法がある。まさに「十分に発達した科学技術は魔法と見分けがつかない」(Clarke 1973)。しかし「脱魔術化」の営みにそれじたい「魔術化」の機能があるなら、私たちが「整理」を行っているときじっさい私たちが行っていることは何か。これはガーフィンケルが開始した、きわめてエスノメソドロジー的な探究である。と同時に「書くとは何か」「読むとは何か」をめぐる、すぐれて文学的な問いでもある。われわれの考える文学社会学の境位はこの水準に位置している。

5. 日常生活の組織化——整理行動の社会学

映画『ジュラシック・ワールド』(2015年、米)冒頭、「机の上を片づけて。乱雑(chaotic)よ」と命ずる上司に対し、物語の主題を先取りすべくオペレーターは次のように反論していたのだ。これはひとつの「生命システム(living system)」であって、「ほどよい安定(just enough stability)」のもと崩落から免れているとみなしたい、と。

私たちが片づけをするとき、私たちがしているのが片づけでないのだとしたら、私たちは片づけをしながらいったい何をしているのだろうか。整理の現場に戻ってみよう。哲学者ベンヤミンが「蔵書の荷解き」をするように、社会学者石飛は「部屋をかたづけ」る。愛書家が蔵書をひもとく流儀と異なり、どちらかといえば実務的にはあるが、しかし同様にその生活を慈しみつつ整序することに違いはない。日常的背景のなかで研究室の机や引き出しを点検整理しつつ、その活動を分析的に省みるという特異な、しかし典型的にエスノメソドロジー・スタイルのテキストを紡ぎあげながら、石飛(2011)は「日常的に整理する」とはどういう営みであるかに照明を与える。

みたように、世にあふれる指南書が教えるのは、「モノや資料を分類し、規格化し、ラベルを貼り付け、階層化し、ファイリングする」ことである。その裏にあるのは「混乱状態に秩序をもたらすのは合理的システムであり、それにもとづいたルールであり、そのルールに従った私たちの日々の活動、日常をできるだけ合理的・科学的に送っていかうとする私たちの努力」という思想である。このとき、私たちの「具体的な日常的活動それじたい」は「無秩序な混沌」と等置される。石飛がエスノメソドロジー研究の教えとともに抵抗を試みるのは、まさにこうした点に対してである。

ここで石飛が喚起するのは、いくぶんカフカ＝ドゥルーズ＝ガタリ的な「巢穴的な空間の秩序」である。すなわち「他人からは、客観的には、ちらかっているように見えても、本人にとっては「何がどこにあるのかわかる」という経験を想起するなら、これを「一般的形式的」なやりかたで「整理」してしまうと、かえって「何がどこに行ったのかわからなくなる」という事態に陥るだろう、というのである。

書架の秩序についても同様であって、「体系的な図書分類記号順に並べてある」ような「匿名の一般的利用者の使用に向けてデザインされた図書館の書架の本」に対して、研究室や書斎の本棚で一般的にみられる風景は、むしろ「本の前に本を置く」「本を横積みにする」という

たぐいのものである。それはいつけん「乱雑」で「無秩序」のようにみえるかもしれない。しかし、この場合「資料の場所が確定していなかったり本が順番に並んでいなかったりすること」は、「秩序の不足」でも「秩序が不要」の状態でもない。これは「巢穴的な組織化」によってもたらされた「巢穴的空間」の秩序というべきものである。多くにとっての生活空間、居間や寝室や書斎はむしろこのように組織されているはずだ、と石飛は主張するのである。

こうして、じっさいに机の引き出しや本棚を「かたづけ」ながら、石飛は「「巢穴的秩序」を内側から組織化」してみせる。「合理的・形式的な秩序」でも「ただの混沌」でもない、「別の秩序」の可能性を、ガーフィンケルとともに示唆するのである。

現在多くの図書館において使用されている「十進分類法」は、いうまでもなく整理術のひとつにすぎない。それは唯一絶対のルールでもなければ、本当に利用しやすい方法でもない。利便性からするなら、純粋に形式的な十進分類の系統樹で整理整頓された空間は、むしろその目指すところと逆のものになってはいはしないだろうか⁷⁾。「私は美術館〔博物館〕があまり好きではない」というヴァレリーは、「私の前に、組織された混乱という奇妙なものが静かに広がる」と書きつけた (Valéry 1923)。赤川次郎ならこう口にするだろう、「私は整然と整理された本棚があまり好きでない」(新潮社編 2013) と。

したがって混沌は、私たちがふつうそれとはみなさない場所において観察されるはずのものである。文学や芸術の世界にみられる「リスト」の本性について論じた快著のなかで、エーコはこう述べている。私たちのコレクションや美術館制度について親しくない「宇宙からの訪問者」ならきっと、「ルーヴル美術館にはなぜ、花瓶や皿や塩入れなどのつまらない日用品、ミロのヴィーナスのような女神像、風景画、普通の人間の肖像画、副葬品やミイラ、怪物の絵、崇拜の対象物、拷問に苦しむ人間の像、戦闘の報告、性的関心を刺激すると予想されるヌード像、さらには考古学的発掘品まで所蔵されているのかと不思議がるだろう」と (Eco 2009)。それはまさしくベンヤミンによって「あまりにも習慣となじんだために秩序のように見えてしまう無秩序」と看破されていたものにほかならない。

他方で、小宮 (2007) はこう述べる。「たしかに博物館や美術館の整然とした展示方法を見慣れた私たちにとって、ヴンダーカンマーのそれは、往々にして訳のわからぬものに映る。あまりにも雑然としており、脈絡のないコレクションに思えるからだ。珍品を蒐集することに情熱を燃やし続けた結果、收拾のつかなくなった部屋。ヴンダーカンマーで何が不思議かといえれば、ガラクタ部屋かゴミ屋敷に間違われかねない雑多な展示方法である」。近代的なコレクション以前の、だがそれを準備したはずの風景だが、これら両者にそもそも本質的な違いは存するのだろうか。どちらも、ある種の展示の魔法によって成立する空間なのではないか (Crane 2000)。ダミッシュがロザンスティールに依拠しながら指摘していたのは、「迷宮」がかならずしも「紆余曲折」や「行き止まり」の混沌でなく、むしろ整然とした「ほぼ規則的」な直線の増殖から構成されていることである (Damisch 1996)。

混沌と境を接した秩序に魅せられた愛書家ベンヤミンにとって、ユートピアは、散乱した蔵

書と整理された書架のあいだのどこかに存在していた。すでに排架され場所を得て片づいた書物の列ではなく、無造作に散らばりこれから排架を待とうとする、その意味で多様な配列の可能性に対して開かれた書物の群れと向き合う瞬間に、それはあった。だから一元的な理想郷ではなく、フーコーなら「ヘテロトピア」とよぶだろう「雑然性」の空間を意味していたはずだ（Foucault 1966）。この場所といえない場所、空間といえない空間に「整理」を論じてきたわれわれのトポスを見いだすことで、本稿の締めくくりとしたい。

6. 千のプラトー、あるいはヘテロトピア

片づけに終わりは訪れない。それは混沌と向き合った私たち人間の、人間性の証明でもある。独自の感性に基づく美術ユニット「クラフト・エヴィング商会」の片割れ、吉田篤弘は、蔵書の整理のもつ「比喩的な意味合い」について描きだす。それは「言葉どおりに本棚の整理——日々、絶えず増殖してゆく本を整理して本棚におさめ、不要な本をひとまとめにしたり、目の仕事に必要な本もひとまとめにしたり——といった作業を指しているが、事は本に限らず、結局、生きてゆくということは、増殖しては混沌としてゆくものとの限りない戦いである。自分の欲望の結果、欲望を満たしたツケ、さらには欲望の上にあぐらをかいた怠惰のツケといったものが、とんでもない速さで増殖してゆく。本棚はその象徴、混沌の堆積場である」（吉田 2011）。

生きることは散らかることである。そこにあるのは「片づけられない」人びと（世界）と、それ以上に「片づける」というシジフォスの営みに託された生の姿なのかもしれない⁸⁾。「片づける」が元来「組織化する organize」の謂であることを思えば、どちらかという日常の瑣末事に属するような本稿の議論が、社会全体を構想また構成するいかなる局面においても適用可能であることを認識せねばならないだろう（高橋、辻 2018）。本稿にとって重要なのは、整理や分類、収集や排架という「図書館的」なふるまいが、かならずしも観念的な「知の秩序」なのでなく、むしろきわめて実践的な秩序に属しているという事実だった。これを「ブッキッシュ」な事象とみなし、「リア充」的世界観から追放しようとする社会学があるなら、その思考こそ観念的というしかない。

したがってこれは、ガーフィンケルがデュルケムとモースから引き継いだ指針のように、観念的／実践的という区分と同時に専門的／非専門的という区分を再審に付す。「分類の社会的基礎」という論点は、それが「未開人の分類」と同様、中国の「易体系」や古代ギリシアの「哲学的理論」、われわれの時代の「科学的分類」、そして「形而上学者や心理学者たちが長い間論議してきたこれらの問題すべて」をくまなく貫いていることを主張する（Durkheim et Mauss 1903）。ガーフィンケルも同様に「素人であろうと専門家であろうと、社会学を行うこと」として、「ト占から理論物理学」「魔法からトポロジーまで」を社会学的研究の視野に収めんとした（Garfinkel 1967）⁹⁾。こうして専門家／非専門家を問わず、テキストを実践的に紡ぎあげ「組織化」する存在について、日常生活の詩学（de Certeau 1980）や社会の詩学（Brown

1977) とよぶべき分析が可能となる。

この遂行的に達成される「秩序化」の営みは、さほど自明のものではない。美学探偵シリーズの語り手は、同学年である探偵役「黒猫」と出会ったばかりのころ、卒業論文を前に遅々として進まないみずからの学業のさまをかえりみて、「まるで散らかった部屋を見ているような気持ち」になる (森 2013)。しかし「研究」とはそもそもそういう性格のものであって、混沌から始まらない研究、あらかじめ道筋がくつきりと見えている研究、当初から整備されている研究など存在しない。語り手も、混乱の原因が「勉強と研究を履き違えていた」ことにあると気づく。それをあえて表現するなら、「答えがあらかじめあるものを探す」ことと「自分で答えを作り出すこととの差異だ。そんな「とんでもなく厄介な世界」が、「散らかった部屋」と向かい合う作業を意味していた。

思考を「整理」すれば、論点や主張が明確に見えてくるというものでもない。整然とした空間に感じられる居心地の悪さは、思考においても同様である。研究者なら思いあたるふしも多かるうが、漫然と書架を眺め、あれこれと書棚を並べ替えているうちに、ふとしたテーマに気づくことになる。魅惑的な「書庫プロジェクト」にとりくんだ松原と堀部は、そのたたずまいにふさわしくこう述べている。書架に並んだ「背表紙を見ることで資料を選び」、「連想ゲーム」をするうち、「こちらの本棚と、あちらの本棚にある本と本が勝手に関係しあったり」した時点で「仕事の半分は終わったも同然」なのだと (松原・堀部 2014)。碩学の徒エーコもおりにふれ同様のことを語っていた。

われわれに必要な観点は、こうした巢穴的連絡の秩序ではなかったか。図書館や博物館がその役割を再定義して「展示」や「コレクション形成」により重心を置くようになり、「利用者の便」や「図書館サービス」に関する議論が増加の傾向にある。しかし、依然として論じられないままの論点はこれである。図書館コレクションという秩序の、その種類や巢穴性についての省察はほとんど存在しない。「ヘテロトピアとしての図書館」という主題は、ようやくその緒に就いたばかりなのである (Radford et als. 2015)。

「すべてのユートピアには、偶然や異物や《雑物》の入る余地がないため、人を意気消沈させるものがある。そこにおいては、すべては秩序立っており、秩序が支配している。すべてのユートピアの背後には、つねに、大きな分類図があり、一つの場所がそれぞれのものにあり、すべてのものにはそれぞれ場所がある」と、ペレックはこぼしていた (Perec 1985)。フローベールを扱うドナートは、「図書館」が失ってしまった「異種混淆的」な秩序をあらためて「博物館的なもの」(むしろ「ヴンダーカンマー的」なもの) とよぶ (Donato 1979)。現代の博物館に無秩序の秩序をみてとろうとするものもいる (Crane 2000)。フーコーならこれを再び「図書館の現象」として論じるだろう (Foucault 1964)。

最後にドゥルーズ＝ガタリに触れなくてはならない (Deleuze et Guattari 1980)。樹状組織に対抗する「リゾーム」の概念は、器官なき身体、組織なき社会体、整理なき秩序と響きあう。なにより、たびたび喚起されるのは「書物」のイメージである¹⁰⁾。それは「一個の多様体」で

あり、さまざまな「機械」を接続する「アレンジメント」なのである。「アレンジメントとしての本は、それ自体他のさまざまなアレンジメントと接続され、他のさまざまな器官なき身体にかかわるだけだ」。そして「混沌＝秩序宇宙」の概念が再登場するのを見ると、われわれは冒頭の主題に立ち戻ることができる——ひとはその生活のまわりにいかなる〈秩序〉を築きあげるか。また、それはいかなる意味で〈詩的＝文学的〉であるのか。

「見える化」というグロテスクな語彙が、「PDCA」という魔法の言葉とともに、私たちの社会を不気味に流通している（清水 2015）。その状況に人びとがいたって無自覚であるさまがなお気味悪い。といって、いたずらに「社会の美しさ」（宮原・藤阪 2012）を愛でるというのも面映ゆい。お掃除ロボットに部屋の掃除をさせていたはずなのに、気がつけば自分のほうが率先して手伝いをしている（岡田 2017）。自分の蔵書に覚えのない本を発見して驚く。解剖台の上でミシンと蝙蝠傘がふと出会う。われわれの考える社会生活の文学的契機は、たとえばそんな瞬間に訪れる。「異なる秩序」がいまいちど、あらためて別の姿で立ち上がる瞬間である。「器官なき身体は器官に対立するのではなく、有機体と呼ばれる器官の組織化に対立するのだ」（Deleuze et Guattari 1980）。

それは観念的なものでも純粹美学的なものでもなく、フーコーが考えたように、眼前に展開されるきわめて物質論マテリアリスティック的な開陳としての「図書館の現象」である（Foucault 1964；清水 2019）。こうして社会の詩学の試みは、日常生活における私たちの活動一般を文学的実践の観点から仔細に眺め、その文学的位相をあきらかにすることにより、規範的読解と組織化に抗し日常生活の文学的な質を高めることに寄与するのである。

【註】

- 1) 昨今関心が寄せられている「不便益」という概念を参照（川上編 2017）。
- 2) 「エスノメソドロジー」の語と同様に、ここで「詩学」は、生活を組み立てる人びとの方法論を指すと同時にそうした方法論に向けられた再帰的分析をも指すことになる。なお、文学社会学におけるいくつかのアプローチの弁別については、井上（2008）；清水（2009）などを参照。
- 3) いうまでもないことだが、より正確には、「リア充」になりたかったけれどもなりきれなかったもののルサンチマンによって成り立つ社会学というほどの意味である（清水 1998）。本シンポジウムのテーマが「文学社会学の可能性」と設定されているので、その輪郭と可能性の中心を描きだすと同時に、あえて対立物を措定することを試みた。
- 4) 同様に、寺井（2015）が蒐集している「タメシガキ」の世界なども、そのような文字どおり「書くこと」の痕跡である。
- 5) 後に触れる「カオスモス」の用語は、こうした動態においてとらえられた混沌＝秩序のさまを指すものである。
- 6) 専門家としてのオーガナイザーが登場する小説（垣谷 2013）では、文字どおりに部屋を片づけること

よりも、人生や人間関係、過去の記憶を「整理」することに重点が置かれるさまがよく描かれている。なお、補完的な言説として「片づけ方はひとそれぞれ」「その人なりの心地よさ」「片づけないことの価値」なども散見されるが、その場合もやはり「計画性」「最小限」に強調があり、「整理整頓のイデオロギー」に支配されていることに変わりはない。ここでは、大平(1990)の描く「モノ語りの人びと」のほうはまだしも「健全」であることだろう。

- 7) 「十進分類法」の祖デュイが、その分類術を考案する際に参照したベーコンや百科全書や万国博覧会の分類体系を支配しているのは、いうまでもなく「ツリー」=系統樹であった。
- 8) 多くの片づけ専門家が口をそろえて指摘するのは、片づけをするにあたって最大の「不要品」が収納ケースを筆頭とした「片づけグッズ」の山だという逆説である。じっさい本稿執筆にあたって、われわれの机の周りにも、将来二度と開くことがないような「整理本」や「見える化本」の数々が堆積し散乱することになった。
- 9) 後に科学社会学において「ストロング・プログラム」と称されるようになった立場である。
- 10) エーコはじっさい「リゾーム」と「リストの都市」あるいは「開かれた迷路」を関連させて論じている(Eco 2009)。

【文献】

アспект編集部 (1991) 『本棚・拝見』 ビジネス・アスキー

赤澤かおり (2017) 『本棚の本』 K T C 中央出版

Benjamin, Walter (1931=1996) "Ich packe meine Bibliothek aus" (浅井健二郎訳「蔵書の荷解きをする」『ベンヤミン・コレクション2』ちくま学芸文庫)

—— (1935=2003) "Paris, die Hauptstadt des XIX. Jahrhunderts" (今村仁司・三島憲一他訳「パリ——一九世紀の首都(ドイツ語草稿)」『パサージュ論 第1巻』岩波現代文庫)

—— (1936=1995) "Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit" (浅井健二郎訳「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション1』ちくま学芸文庫)

Berman, Morris (1981=1989) *Reenchantment of the World*, Cornell Univ. Pr. (柴田元幸訳『デカルトからベイトソンへ』国文社)

Brown, Richard H. (1977) *A Poetic for Sociology*, Univ. of Chicago Pr.

de Certeau, Michel (1980=1990) *L'Invention du quotidien, vol.1: arts de faire*, Gallimard. (山田登世子訳『日常実践のボーエティーク』国文社)

Clarke, Arthur C. (1973) *Profiles of the Future*, Revised ed., Harper&Row.

Crane, Susan A. ed. (2000=2009) *Museums and Memory*, Stanford Univ.Pr. (伊藤博明他訳『ミュージアムと記憶』ありな書房)

Damisch, Hubert (1996=1998) *Skyline*, Seuil. (松岡新一郎訳『スカイライン』青土社)

Deleuze, Gilles et Felix Guattari (1980=2010) *Mille Plateaux*, Minuit. (宇野邦一他訳『千のプラトー』上・

中・下、河出文庫)

- Donato, Eugenio (1979=1985) "The Museum's Furnace," in Harari, J.V.(ed.), *Textual Strategies*, Cornell Univ.Pr. (高山宏訳「博物室の炉」『現代思想』第13巻2号)
- Durkheim, Emile et Marcel Mauss (1903=1980) "De Quelques formes primitives de classification," *L'Année sociologique*, 6, 1903, pp.1-72. (小関藤一郎訳『分類の未開形態』法政大学出版局)
- Eco, Umberto (2009=2011) *Vertigine della lista*, Rizzoli. (川野美也子訳『芸術の蒐集』東洋書林)
- Elsner, John & Roger Cardinal, eds. (1994=1998) *The Cultures of Collecting*, Harvard Univ. Pr. (高山宏他訳『蒐集』研究社出版)
- Foucault, Michel (1964=2006) "La Bibliothèque fantastique" (工藤庸子訳「幻想の図書館」『フーコー・コレクション2』ちくま学芸文庫)
- (1966=2013) "Les Hétérotopies" (佐藤嘉幸訳『ユートピア的身体／ヘテロトピア』水声社)
- Frost, Randy O.&Gail Steketee (2010=2012) *Stuff*, Houghton Mifflin Harcourt. (春日井晶子訳『ホーダー』日経ナショナルジオグラフィック社)
- 古沢和宏 (2012=2015) 『痕跡本の世界』ちくま文庫
- Garfinkel, Harold (1967) *Studies in Ethnomethodology*, Polity Press.
- 本の雑誌編集部編 (2018) 『絶景本棚』本の雑誌社
- ICD (2012=2013-2014) *The ICD Guide to Challenging Disorganization*, Institute for Challenging Disorganization. (ブラッドリー純子訳『慢性的に片づけられない人をサポートするオーガナイズの手法』葉月出版)
- 生田耕作編 (1980=2014) 『愛書狂』平凡社ライブラリー
- 井上俊 (2008) 「社会学と文学」『社会学評論』59巻1号
- 石飛和彦 (2011) 「部屋をかたづける」『天理大学生涯教育研究』(15)
- 伊藤ガビン (1995) 『魔窟ちゃん訪問』アспект
- 岩波邦明 (2015) 『片付けない技術』宝島社
- 垣谷美雨 (2013=2016) 『あなたの人生、片づけます』双葉文庫
- 柏木博 (2011) 『探偵小説の室内』白水社
- 春日武彦 (2005) 『奇妙な情熱にかられて』集英社新書
- 桂英史 (1995=2002) 『インタラクティブ・マインド』NTT出版
- 川上浩司編 (2017) 『不利益』近代科学社
- 川本武、津藤文生、大橋弘 (1996-1998) 『本棚が見たい!』1～3、ダイヤモンド社
- 喜国雅彦 (2001-2014=2005-2017) 『本棚探偵』シリーズ全4巻、双葉文庫
- 紀田順一郎 (2017) 『蔵書一代』松籟社
- 編 (2005=2014) 『書物愛』日本篇・海外篇、創元ライブラリ
- 小林光恵 (2008) 『片づけられない女は太る』新講社
- 小宮正安 (2007) 『愉悅の蒐集 ズンダーカンマーの謎』集英社新書
- 小山龍介 (2016) 『片づけ HACKS!』東洋経済新報社

- 草森紳一 (2005=2018) 『随筆 本が崩れる』 中公文庫
- 牧野智和 (2015) 『日常に侵入する自己啓発』 勁草書房
- 丸山圭三郎 (1991) 『カオスモスの運動』 講談社学術文庫
- 松原隆一郎・堀部安嗣 (2014) 『書庫を建てる』 新潮社
- 松浦寿輝 (1998) 『知の庭園』 筑摩書房
- 宮原浩二郎・藤阪新吾 (2012) 『社会美学への招待』 ミネルヴァ書房
- 美結 (2014) 『こころの部屋の整理整頓術』 文芸社
- 森晶麿 (2013) 『黒猫の刹那あるいは卒論指導』 ハヤカワ文庫
- 森下純子 (2012) 『片づけたいけど「片づけられない」がなくなる本』 PHP 文庫
- Murray, Stuart A.P. (2009=2011) *The Library: An Illustrated History*, Skyhorse Publishing. (日暮雅通訳『図説 図書館の歴史』原書房)
- 根本彰 (1998) 『文献世界の構造』 勁草書房
- 日本ライフオーガナイザー協会監修 (2011) 『ライフオーガナイズ』 主婦と生活社
- 日本ライフオーガナイザー協会監修 (2017) 『ライフオーガナイズの教科書』 主婦の友社
- 西牟田靖 (2015=2018) 『本で床は抜けるのか』 中公文庫
- 岡田美智男 (2017) 『〈弱いロボット〉の思考』 講談社現代新書
- 岡崎武志 (2013=2017) 『蔵書の苦しみ』 光文社知恵の森文庫
- 奥野健男 (1999) 『文学のトポロジー』 河出書房新社
- 大平健 (1990) 『豊かさの精神病理』 岩波新書
- 大塚敦子 (2005) 『モノとわかる！ 生き方の整理整頓』 岩波書店
- Perec, Georges (1985=2000) *Penser Classer*, Hachette (坂上脩訳『考える／分類する』法政大学出版局)
- Petroski, Henry (1999=2004) *The Book on the Bookshelf*, Knopf. (池田栄一訳『本棚の歴史』白水社)
- Pomian, Krzysztof (1987=1992) *Collectionneurs, amateurs et curieux*, Gallimard. (吉田城・吉田典子訳『コレクション』平凡社)
- Radford, Gary P., M.L.Radford & J.Lingel (2015) "The Library as Heterotopia: Michel Foucault and the Experience of Library Space," *Journal of Documentation*, July.
- 清水学 (1998) 「大人意識と社会人」(池井望・仲村祥一編『社会意識論を学ぶ人のために』世界思想社)
- (2009) 「文学と社会」(『社会学ベーシックス 3 文化の社会学』世界思想社)
- (2015) 「「整理」にあこがれる人たち：瑣末な日常における「整序化」問題」追手門学院大学「木曜の会」、2015 年 6 月 11 日報告 (非公式)
- (2018) 「図書館というトポス (1)」『神戸女学院大学論集』第 65 巻 2 号
- (2019) 「図書館というトポス (2)」『神戸女学院大学論集』第 66 巻 1 号
- 新潮社編 (2013=2016) 『私の本棚』新潮文庫
- Solden, Sari (1995=2000) *Women with Attention Deficit Disorder*, Underwood. (ニキリンコ訳『片づけられない女たち』WAVE 出版)

- Steketee, Gail & Randy O. Frost (2006=2013) *Compulsive Hoarding and Acquiring*, Oxford Univ.Pr. (五十嵐透子
訳『ホーディングへの適切な理解と対応』金子書房)
- 鷺見洋一 (2009) 『『百科全書』と世界図絵』 岩波書店
- 高橋源一郎、辻信一 (2018) 『「雑」の思想』 大月書店
- 谷沢永一 (1996) 『雑書放蕩記』 新潮社
- 寺井広樹 (2015) 『「試し書き」から見えた世界』 ごま書房新社
- Tolin, David, Randy O.Frost & Gail Steketee (2013=2017) *Buried in Treasures*, Oxford Univ.Pr. (五十嵐透子・土
屋垣内晶訳『片付けられない自分が気になるあなたへ』 金剛出版)
- とみさわ昭仁 (2016=2018) 『無限の本棚』 ちくま文庫
- 外山紀久子 (2012) 「掃除ポイエーシス」(西村清和編『日常性の環境美学』 勁草書房)
- 宇田川悟 (2012) 『書斎探訪』 河出書房新社
- 海野弘 (1990) 『室内の都市』 住まいの図書館出版局
- 内澤旬子 (2006=2011) 『センセイの書斎』 河出文庫
- Valéry, Paul (1923=2012) "Le Problème des musées" (今井勉訳「美術館の問題」『ヴァレリー集成V』 筑摩
書房)
- Walter, Dawna (1997=1997) *Organized Living*, Antique Collectors Club. (鈴木宏子・薩摩美知子訳『オーガナ
イズド・リビング』トレヴィル)
- 渡辺武信 (1981) 「わが家は本だらけ」『現代詩手帖：特集図書館幻想』 第24巻11号
- (1988) 『住まい方の演出』 中公新書
- 吉田篤弘 (2011=2015) 『木挽町月光夜咄』 ちくま文庫
- 由起しげ子 (1949) 「本の話」(紀田編 2005=2014)

(しみず まなぶ 神戸女学院大学文学部)